

沖縄の暴走族とゴーパチ



◇『チャンプロード』（月刊雑誌、笠倉出版社、1987年～現在）

打越 正行

雑誌『チャンプロード』は、日本社会におけるユース・サブカルチャーズである暴走族と旧車會を対象とし、またそれらを主な読者とする月刊誌である（*1）。暴走族とは日本社会において主に15歳（中学卒業）から20歳前半の少年によって組織されている若者集団のひとつである。主な活動は、週末の深夜に、特攻服をまといチーム名が描かれた旗を振りながら改造したバイクに乗り、爆音を出しながら公道を走ることである。このような活動はたびたび逸脱行為として取締りの対象とされてきた。他方で、学校や就労世界から排除された下層若者である彼らは、地元の暴走族に属することでアイデンティティを獲得し、その文化とそこでの仲間とのつながりを通じて社会化され、再び就労世界や家庭へと接続されてもきた。

1970年代に日本社会で誕生した暴走族は、現在、都市部では衰退し、一部の地方でのみ活動を展開している。そのような変化はあるものの、同誌が1987年に創刊して以来、暴走族少年らに与えた影響は非常に大きい。例えば、ある県では販売禁止雑誌に指定された。他方で、暴走族を中心とするヤンキー文化の現役世代にとっては他の地域や近隣地区へのアピールといった交流を引き起こし、また引退世代にとっ

てもかつての思い出を記憶するという重要な役割を担ってきた。これらの役割は、同誌のなかのほとんどのコーナーが暴走族少年らによる投稿や要望によって成り立っていること（*2）、また編集者が全国各地に直接に出向いて取材を行うという2つの特徴によってこそ担われてきたし、それらによって同誌の水準は維持されてきたと考えられる。

続いて、同誌の内容について紹介する。同誌にある暴走族を対象とした記事には「爆音とともに生きる戦士たち」と、「俺ら暴ヤン単車隊」がある。そしてここ数年の間に、この2つの記事の投稿元の多くが、都市ではない地方、なかでも沖縄であることは注目に値する。それらの記事に沖縄の暴走族が掲載された比率は、それぞれ少なくとも28.3%、21.6%以上である（*3）。そのようなことから、私は現在、沖縄において暴走族・ヤンキー少年・少女を対象としたフィールドワークを展開している。その調査からは、1970年代の日本社会で誕生した暴走族が現在の沖縄で独自の変化を経て活動を展開していることを確認できた。では、いかに暴走族は沖縄で受け入れられたのか。また、そこでいかなる変化が生じたのか（*4）。その過程をみることができるのがストリートである。



地元のajtでいつもお世話になってる暴走族の先輩と後輩。これからゴーパチへ出陣する直前のコマ。
(撮影：打越)

ここで沖縄の暴走族、ヤンキー少年・少女らにとってのストリートとは、深夜のゴーパチである。ゴーパチとは沖縄の国道58号線のことであり、そこには匿名性、流動性、混雑性などの特徴を指摘できる。またこれらの特徴に加えて、なによりゴーパチには緊張感がある。警察と暴走族との衝突にはお互い相手に弱みを見せられないという意地が垣間みえる。もちろんそのやりとりの歴史で、お互い「この前のヤツだ」ということはわかっている。パトカーがバイクを追いかけて、そしてそれから逃げるだけではなく、最終的にはお互いに相手めがけて追突を試みる。猛スピードでお互い衝突寸前まで迫り、急ブレーキで衝突を回避する。このとき両者には50cm程の隙間しかない。おそらく、先にブレーキを踏んだ方が負けなのだろう。警察にとっては威信を失う程度だが、暴走族少年にとっては鑑別所行きとなる。そして先週も先々週もその格闘を見てきたギャラリーはそのことをしっかり記憶している。このような激しい夜は、月に一回くらいにしかないものの、実際に遭遇すると下手なサーカスより興奮する。ストリート、つまりゴーパチとは警察と暴走族が激しくぶつかる空間／場所である。ではそこでは、お互い何に対し、何を争いぶつかっているのだろうか。

暴走族少年の多くは、学校からはじき出された若者である。そこには沖縄の言語、文化とそれを日本化する力がぶつかる。また彼らは家庭での生活も不安定である。そのために、沖縄に入ってきた日本生まれの暴走族は、彼らによって流用された。そこには一世代超えた伝統的沖縄文化をまとったおじい（祖父）、おばー（祖母）との葛藤がある。また季節労働で沖縄の外で働く場合には、沖縄出身であることをもとに罵言を浴びせられる。つまり、彼らは学校、家庭、そして職場のどこでも日本人でも沖縄人でもないにもかかわらず、同時に日本人、沖縄人であることを求められる。



インタビュー中の一コマ。私が乗車しているこの原付バイクで、調査中に3000キロ走破した。
(撮影：ユーミ)

彼らはその状況を生き抜こうと自前の若者集団を組織する。そこでは、年齢をもとにした組織形態にもとづいた自治が生じた。また、一般社会とは異なる規範がある。彼らにとって、地元は自治を行う自らの陣地である、つまり地元で何が正しいかは独自の手続きに沿って自らが決める。しかし、一般社会では場所に関係なく規範は普遍的に適用される。ゴーパチではそのせめぎあいが生じている。彼らの多くはパトカーの車内や取調室における違法な取り締まりにはあきらめの態度を示す。彼らは、自らの陣地である地元やそのグレーゾーンであるゴーパチでやりたい放題したのだから、相手の陣地で

記事の名称	「爆音とともに生きる戦士たち」	「俺ら暴ヤン単車隊」
取材対象	同じ暴走族に所属する2人の少年・少女	1つの暴走族チーム
取材形式	ヤンキー界の重鎮こと岩橋健一郎氏によるインタビューと写真撮影 (インタビューが中心)	写真撮影とインタビュー (写真撮影が中心)
記事の数	43個 毎月掲載なので取材要請は多いと推測可能	12個 取材を行った月のみの掲載なので取材要請は少ないと推測可能
取材前の準備	2人以外のメンバーは登場しないので、着用する特攻服と、自らが事前に撮影した写真の準備であり、事前準備は比較的容易	暴走族のメンバー全員がそれぞれ特攻服を着て、旗を持って集合し、改造したバイクを10台以上そろえ、全員集合の写真をその場で撮影するので、事前準備は大変
取材を要請する暴走族の特徴	活動が活発な暴走族はもちろん、活動が下火になった暴走族や少人数の暴走族でも取材要請は可能	世代をまたぐ規模のメンバーの確保、それに加えてチームワーク、連絡体制、資金源など安定していないと取材要請は不可能
掲載された暴走族の都道府県	千葉県、埼玉県、栃木県、神奈川県、静岡県、茨城県、沖縄県	栃木県、埼玉県、兵庫県、大阪府、福岡県、沖縄県

は相手のやりたい放題も認める。同時に「次こそは…」と内なる闘志を抱く。

彼らがゴーパーチで闘っている対象は、沖縄県警である。ただ彼らにとって、それはしんどい日常を行き抜く過程で作り上げた地元での自治、つながりを守るための闘いといえる。このように、都市部でその役割を終えたかにみえる暴走族ではあるが、現在の沖縄の暴走族少年たちは、上述したストリートでの反抗の実践からもわかるように、暴走族を地元の生活の基盤として独自に読み替えながら、なんとか生き抜いてきた。たとえ地元での彼らの自治が無秩序に映ったとしても、それを解体することは誰にもできないし、それは誤ってさえいる。完全には理解できないことを前提に彼らの声を丁寧に聞き、支離滅裂で時には誤っている声に応答し続けること、これこそ私たちが『チャンプロード』から学ぶべきものではなかろうか。同誌の紹介というより同誌に触発されて始めた私の調査報告になったが、同誌の読み方としてあながち間違っていないだろう。

(※1) ここでは、同誌の暴走族に関する記事についてのみ扱う。

(※2) 同誌には、投書した体験のない少年でさえも

それを可能とする仕組みが施されている。その他にも、写真と活字の比率、文体、構成、広告など細部にわたり配慮がなされている。

(※3) この比率は、2005年1月から2009年12月まで5年間の同誌60冊のうち、現時点で入手できた43冊をもとに計算した。入手できていない17冊には沖縄の暴走族は掲載されてない前提のもとで計算したため実際の比率はこれより高い。それぞれの記事は上の表を参照せよ。

(※4) 詳しくは、拙稿（打越 2008、2009）で述べている。

関連文献

小田亮、2009「生活の場としてのストリートのために——流動性と恒常性の対立を超えて」関根康正編『ストリートの人類学（国立民族学博物館調査報告）』81：489-518。

鈴木裕之、2000『ストリートの歌—現代アフリカの若者文化』、世界思想社。

鈴木慎一郎、2000『レゲエ・トレイン—ディアスポラの響き』、青土社。

打越正行、2008「仕事ないし、沖縄嫌い、人も嫌い——沖縄のヤンキーの共同性とネオリベラリズム」『理論と動態』1：21-38。

——、2009「植民地沖縄におけるネオリベラリズムと反抗——ヤンキー・サブカルチャーズ研究序説」『部落解放』15：73-90。

（うちこし・まさゆき 社会理論・動態研究所）